

平成 27 年度教職大学院派遣研修報告書

派遣者番号	27K14	氏名	内山 治之
研究主題 —副主題—	中学校の荒れを未然防止及び改善する生徒指導の具体的な取組		
所属校	荒川区立第一中学校	派遣先	東京学芸大学教職大学院

項目	内容																																																								
I 研究の目的	<p>1 背景 筆者が初任者のとき、指導教員から指導されたことの一つに“中学校第2学年生の11月の大切さ”がある。別名“Black November”とも教わった。中学校3年間の中では、生徒指導のポイントがいくつかあるが、中学校第2学年の11月をどのように乗り切るかで、その後の中学校生活が大きく変わるというのだ。つまり、11月をうまく乗り切れば、第2学年の後半や第3学年は順調に進んでいく。逆にうまく乗り切れなければ、生徒は荒れていき第3学年でも指導に手を焼く日々が待っているというのだ。では、第2学年の11月にはどのような背景があるのだろうか。 (1) 11月について 河村(1999)は学級経営での大切な時期の一つとして示している。 (2) 第2学年の時期について 文部科学省によると、児童生徒の問題行動等について、今後の生徒指導施策推進の参考とするため、標記調査を実施し調査結果をまとめた『平成26年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について(平成27年9月16日)』がある。暴力行為では特に中学校第2学年の生徒が多いことが分かった。文部科学省の調査結果では、小学校、高等学校と数倍の開きがあるほど、中学校では問題行動が多いことが分かる。中学校の教員はこのような困難な状況を前提とし、毅然とした対応やきめ細やかな粘り強い指導が求められている。</p> <p>2 目的 学校の荒れは、生徒の問題行動が引き起こす。学校を荒れさせないための取組は、多くの文献で示されているが、実際の学校現場で具体的にどのように取り組んでいったのかが分からない部分も多くある。例えば、「生徒との温かな人間関係を作り上げること」や「生徒を信頼する取組」などという言葉だけで示され、このことを実現するための詳細な取組事例がほとんど記されていない。 そこで、本研究では文献研究のみならず、現地調査により具体的な実践事例から荒れへの対応方法を考察し、中学校の荒れの未然防止及び改善するために、どのような生徒指導に取り組んでいくことが必要なのかについて追究することを目的とする。</p>																																																								
II 研究の方法	<p>1 基礎研究 ①先行研究の調査 ②先行事例の収集 ③質問紙の作成</p> <p>2 調査研究 ①学校訪問 ②インタビュー調査</p> <p>3 まとめ ①分析と考察 ②報告書の作成</p>																																																								
III 研究の結果	<p>【訪問調査】</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>荒れの形成過程</th> <th>改善</th> <th>K区立L中</th> <th>M市立N中</th> <th>O区立P中</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>ア. 生徒個人の問題行動の継続過程</td> <td>①予防的・発達的援助的指導 ②人間関係づくり</td> <td>〇</td> <td>⑦</td> <td>〇</td> </tr> <tr> <td>イ. 個人の問題行動が学校の荒れ・授業崩壊といった集団の荒れへの展開</td> <td>③学習指導 ④学級・行事・部活等 ⑤保護者との連携 ⑥外部との連携</td> <td>③ ④</td> <td>①⑤ ④</td> <td>① ②</td> </tr> <tr> <td>ウ. 集団の荒れの継続過程</td> <td>⑦組織的体制 ★その他</td> <td>①② ④</td> <td>②③⑥⑦ ②③</td> <td>③④ ②</td> </tr> </tbody> </table> <p>【インタビュー調査】</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>荒れの形成過程</th> <th>改善</th> <th>【ア】</th> <th>【イ】</th> <th>【ウ】</th> <th>【エ】</th> <th>【オ】</th> <th>【カ】</th> <th>【キ】</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>ア</td> <td>①予防的・発達的援助的指導 ②人間関係づくり</td> <td>〇</td> <td>〇</td> <td>〇</td> <td>〇</td> <td>〇</td> <td>〇</td> <td>〇</td> </tr> <tr> <td>イ</td> <td>③学習指導 ④学級・行事・部活等 ⑤保護者との連携 ⑥外部との連携</td> <td>〇</td> <td>〇</td> <td>〇</td> <td>〇</td> <td>〇</td> <td>〇</td> <td>〇</td> </tr> <tr> <td>ウ</td> <td>⑦組織的体制 ★その他</td> <td>〇</td> <td>〇</td> <td>〇</td> <td>〇</td> <td>〇</td> <td>〇</td> <td>〇</td> </tr> </tbody> </table>	荒れの形成過程	改善	K区立L中	M市立N中	O区立P中	ア. 生徒個人の問題行動の継続過程	①予防的・発達的援助的指導 ②人間関係づくり	〇	⑦	〇	イ. 個人の問題行動が学校の荒れ・授業崩壊といった集団の荒れへの展開	③学習指導 ④学級・行事・部活等 ⑤保護者との連携 ⑥外部との連携	③ ④	①⑤ ④	① ②	ウ. 集団の荒れの継続過程	⑦組織的体制 ★その他	①② ④	②③⑥⑦ ②③	③④ ②	荒れの形成過程	改善	【ア】	【イ】	【ウ】	【エ】	【オ】	【カ】	【キ】	ア	①予防的・発達的援助的指導 ②人間関係づくり	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	イ	③学習指導 ④学級・行事・部活等 ⑤保護者との連携 ⑥外部との連携	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	ウ	⑦組織的体制 ★その他	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
荒れの形成過程	改善	K区立L中	M市立N中	O区立P中																																																					
ア. 生徒個人の問題行動の継続過程	①予防的・発達的援助的指導 ②人間関係づくり	〇	⑦	〇																																																					
イ. 個人の問題行動が学校の荒れ・授業崩壊といった集団の荒れへの展開	③学習指導 ④学級・行事・部活等 ⑤保護者との連携 ⑥外部との連携	③ ④	①⑤ ④	① ②																																																					
ウ. 集団の荒れの継続過程	⑦組織的体制 ★その他	①② ④	②③⑥⑦ ②③	③④ ②																																																					
荒れの形成過程	改善	【ア】	【イ】	【ウ】	【エ】	【オ】	【カ】	【キ】																																																	
ア	①予防的・発達的援助的指導 ②人間関係づくり	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇																																																	
イ	③学習指導 ④学級・行事・部活等 ⑤保護者との連携 ⑥外部との連携	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇																																																	
ウ	⑦組織的体制 ★その他	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇																																																	

	<p>前頁の表は、「学校の荒れ」の先行研究及び改善事例から導いた「学校の荒れ」を改善するための取組と、訪問調査、インタビュー調査の内容を照らし合わせ、項目ごとに分けたものである。</p> <p>二つの表から分かることは、全体的に見ると全ての項目が含まれていることである。該当しない項目があるのは、地域性や生徒の様子、経験した学校の取組等による違いがあるからだろう。しかし、それらは学校の荒れの未然防止及び改善へ取り組む際には、参考にした方がよい項目であるとは言えるだろう。また、設定した項目以外の“その他”も生徒指導上大切な項目である。</p> <p>ここで、再度「学校の荒れ」について考えてみたい。「学校の荒れ」についてのキーワードとして、加藤は“分化”“孤立”“集団化”、吉田は“指導がうまくいかない”、小林は“人間関係の希薄”を挙げていた。これらと、「実践事例」「訪問調査」「インタビュー調査」と合わせて考察すると、“関係性”という言葉が筆者には思い浮ぶ。生徒同士の関係性、問題行動を起こす生徒と他の生徒の関係性、問題行動を起こす生徒と教師の関係性、他の生徒と教師の関係性、教師同士の組織としての関係性、保護者、地域、外部機関、そして、社会との関係性等が考えられる。関係性が乏しいことで「学校の荒れ」が引き起こされ、また関係性が良ければ「学校の荒れ」の未然防止及び改善につながっていくことが読み取れる。さらに、問題行動を起こす生徒や他の生徒と教師との関係は、生徒と学習との関係性ともいえるのではないか。問題行動を起こす生徒はどこで分化、孤立を感じるかと言えば、最初は授業からだろう。授業についていけないことで、他の生徒との距離を感じ、孤立してしまう。これは、問題を起こすことのない生徒にも言えることである。教師が学びとの関係性を、どの生徒にも構築することができるかが問われているのではないだろうか。「学校の荒れ」を収めると聞いたとき、厳しい指導ができる教員がいなければならないわけではない。様々な関係性を、学校を介して構築することができるか否かが「学校の荒れ」を収めるためには大切なのである。これは、どの教員にもできることであり、どの教員にも求められていると考えるべきである。また、昨今は協働性のある組織として教員同士の関係性の在り方が注目されている。生徒も教員も、誰かが誰かと必ずつながっていることが重要である。また、それが、最終的に社会との関係性にまで至るように教師は生徒のために、人間関係を調整する力を身に付ける手だてに取り組んでいかなければならないものだと考える。</p>
<p>IV 考察</p>	<p>実践事例や訪問調査、インタビュー調査では第2学年の11月についての言及はされていないことが分かった。中学校3年間の中で重要視されている時期として“第1学年”が挙げられていた。つまり、生徒指導に関しては、第2学年ではなく第1学年に重きを置いているということだ。確かに、「学校の荒れ」自体は一気に噴出するものではなく、徐々に形成されることが加藤の研究等から分かった。第2学年の11月という時期は、それまでの指導の結果が表れる時期なのではないかと考える。筆者の場合も11月辺りから荒れが噴出したケースが二つあった。</p> <p>しかし、いずれのケースもそれまでの間に個人・学級・学年と、よりよい関係性を築けなかったことが推察される。そのことを踏まえると、第2学年の11月直前に何かの対策をとるのではなく、それまでに何をしてきたのかが重要となる。多くの中学校では、第1学年の段階での指導を強めるだろう。ただ、第1学年で厳しい生活指導をしても、第2・3学年と生徒の体力が教員を上回ることで失敗するケースがある。ただ厳しい指導をするのではなく、第1学年の時期から生徒同士や教師と生徒との関係性を構築したり、教員間との関係性を強め、統一した指導体制を構築したりしていくことが学校を荒れさせないために必要になるだろう。</p>

